狩猟採集民ムラブリの子どもの遊びに関する記述的研究

大澤 清二¹ 下田 敦子¹ 二文字屋脩²

Descriptive research on the play of Mlabri hunter-gatherers children

Seiji Ohsawa¹, Atsuko Shimoda¹ and Shu Nimonjiya²

abstract

The Mlabri people of the mountainous region of northern Thailand were nomadic hunter-gatherers until 20 years ago. They have begun to settle in recent years, but their original customs and play from their life in the forest still endure.

Over three years we conducted a survey of Mlabri children play. Among their games were straddling banana trees (ngên khing lam kuëy), playing and swinging on vines (ngên mòq), hide and seek (hnpok tò mlaq), tag (ban tot tò mlaq), spear throwing (dor khòt), and cutting grass (ngên thet hny hnyay). These are the same games that Mlabri children played in their pre-settlement life in the forest.

This kind of play must have contributed greatly to exceptional physical abilities of the forest-dwelling Mlabri, and cultivating these skills since early childhood must have been deeply connected to their survival in the past. Studying the play of Mlabri children, and the role it plays in their development, could be useful in understanding the roots and significance of modern children's play as well.

Key words : hunter gatherer, Mlabri, play, Thailand, physical abilities

狩猟採集民, ムラブリ, 遊び, タイ, 身体能力

I 研究の意義

21世紀の現代においても、世界には狩猟と採集によって生活している人々がいる。彼らは日本であれば縄文時代に遡るほどの遠い過去のライフスタイルをそのまま持続している。

本研究の対象であるタイ山中に生きるムラブリ(Mlabri)は、ほんの20年前までは、深い森を遊動して狩猟採集生活を営んでいた。西田(2007)が狩猟採集民の特徴として指摘したように、彼らは農耕、集中的季節労働、定置漁具、永続的家屋、排泄物の処理、墓地などとは無縁の生活をし、狩

猟と採集によって食料を獲得し、長い時間を現代まで粘り強く生き抜いてきた。しかし20年ほど前からこの遊動生活は劇的な環境変化のために持続不可能になった。ムラブリは定住を開始し、農耕に従事し、現在では狩猟と採集は補助的な役割を果たすようになった。

我々の祖先も遠い過去に狩猟採集生活から定住生活へ革命的な転換をはかり、やがて農耕社会から現代の高度化した工業社会、情報社会へと時間をかけて到達した。現在、我々の生活は衣食住をはじめ労働、生活習慣の殆どで狩猟採集時代の痕跡を留めていないので、現在から過去に遡って祖

¹ 大妻女子大学人間生活文化研究所

² 首都大学東京大学院人文科学研究科社会人類学博士後期課程

¹ Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University

² Tokyo Metropolitan University (Graduate School of Humanities, Dept. Social Anthropology)

先の行動を理解するには大きな困難が立ちはだかっている。

ここで身体に関する研究を主要関心とする著者らがムラブリを研究対象とすることの意義は、ムラブリが未だ狩猟採集生活の記憶に新しく、現在でもその時代の習慣や行動を残し、かつて森に生活していた時の行動を再現できることにある。

本研究では、ムラブリの子ども達が今なお行っている遊びを記述し、若干の考察を加えた。この研究により、現代の子どもの遊びを根源的に理解する一助としたい。

Ⅱ ムラブリの社会・生活環境

ムラブリは20年ほど前までは豊かな森の中を、バンド^{註1)}を形成して遊動し、一カ所に数日間だけ留まって狩猟採集活動をし、食料が乏しくなると再び新たなポイントに移動した。その行動範囲はラオスのサイニャブリー県からタイのナーン県にかけての非常に広範囲の深い森であった (Trier, 2008)。彼らは他民族集団との衝突を巧みに回避し、非常に慎重に他民族と物々交換をし、時には農作業を手伝い、鉄の槍やナイフを入手し、狩や採集に用いてきた。彼らが最初に記録されたのは1886年で、一人のタイ人が「ピー・パー (森のお化け)」と呼んだ (Winichakul, 2000)。現在ではタイ人はムラブリを「黄色い葉のお化け (Phi Tong Lueang)」というが、これはその幻のような行動に由来するのであろう。実際に1910年代後半までムラブリについての目撃情報はなく (Seidenfaden, 1919)、その後もその全体像は不明であったことから、「東南アジアで最も興味深く、またほとんど知られていない人びと」 (Schliesinger, 2003) と紹介されてきた。20世紀の前半に Bernatzik (1938) が東南アジアを学術探検し、タイの山中でムラブリに遭遇し、その生活の幾つかのシーンを写真に撮影し、公開した。この報告には現在の知識からするとやや不思議な証拠写真も混在しているように思われるが、まとまりを持った研究的な報告はこれが嚆矢であった。

第2次世界大戦頃まで、ムラブリの目撃情報は、チェンライ県やバヤオ県、プレー県、ナーン県におよぶ広大な地域の森に広がっていた (Trier,

2008)。当時のタイ政府のミャンマーやラオスと国境を接する北部地域の管理は厳格でなかったもので、彼らは自由に森で暮らすことができた。タイ政府の公式見解はムラブリを20世紀初頭にラオス・サイニャブリー県から移住してきた後住の少数民族とし、これは研究者によっても支持されている (Trier, 1992)。ところが、第2次世界大戦以降、タイ北部で大規模な森林消失が起こり、彼らの生活圏は徐々に侵害されていくこととなる。その要因として、低地農民による高地での農地拡張、チークをはじめとする林業資源を狙った商業的森林伐採、そして共産党ゲリラの排除を目的とした森林地帯への道路の延長などが挙げられている (Delang, 2002)。

1982年の内戦終結を契機に、タイ政府は、当時ムラブリが生活圏としていたプレー県とナーン県の森林地域を厳密に管理し始め、およそ5000平方キロメートルに及ぶ森林の一部を森林伐採のための地域に指定した。またその一部は農地として地元農民に提供し、その他は国立公園に指定した (全6カ所)。そのためにムラブリの生存基盤としての森は実質的に奪われてしまった。それまでムラブリを意図的に無視し続けていた政府は、1980年代中頃からムラブリを対象とする開発福祉プロジェクトを開始し、1999年にはナーン県ウィエンサー郡にファイ・ユアック村を設置した。そのためにムラブリは森の遊動生活を放棄し、定住して農業賃金労働者として他民族に労働力を提供することに傾斜して行くのである。現在ムラブリの生活圏はプレー県とナーン県に限局するようになり (Nimonjiya, 2015)、以前にましてモンを中心とした他民族への経済的依存を強め、ライフスタイルは狩猟採集に依った遊動生活から一転して賃金労働や換金作物栽培、エスニック・ツーリズムが生計の柱となる定住生活へと変化したのである (Trier, 2008; Vongvipak et al., 1992; Ikeya and Nakai, 2009)。

また、2007年にはシリントーン王女の訪問を契機に王室プロジェクトが始まり、タワ村、ファイ・ルー村、プー・ファー開発センターにムラブリの居住地が新たに作られた (図1)。なお、政府による介入以前からプレー県にてムラブリの生活向上に尽力しているアメリカ人宣教師により1980年

図 1 ムラブリの現在の居住地

代前半にはファイ・ホーム村が作られている。

遊動民が定住化するのは生活維持のための食料確保を有利にするための適応戦略の一つである。ムラブリの場合は結果としては定住を自ら選択したとも言えるが、実際は上記のような政治的、社会経済的な現代社会における外的な圧力によって定住化に追い込まれたという表現の方が適切かもしれない。

現在、研究者は森の中を、幻を追うようにムラブリを探す必要がなくなった。2010 年には我々はナン県の山中のファイ・ユアック村という定住キャンプでムラブリの大集団（全人口の 60%に相当する 200 人）を対象に本格的な調査を実施できるようになった。キャンプには電気が引かれ、水がキャンプ内の貯水タンクによってもたらされて、徐々に生活は便利になっている。

現在、ムラブリはかつてのように森を遊動しているわけではない。従って、遊動中のリアルなライフスタイルをそのまま観察できるわけではない。しかし、2014 年の時点では未だ森を遊動していた時代の生活や行動を十分に再現し追跡できる状態にある。本研究では、やがては消失しそうなムラブリの子どもの遊びを記録し、その身体技術との関係を報告する。また本研究は遊びの社会学、民族学的な意義について考えるものではなく、身体発育発達学の立場からの接近であることを

断っておく。

Ⅲ 調査地（ムラブリの現在の居住地）とデータの収集

1. 調査地点

調査地はタイ北部のナン県バーンルアン郡に設けられた小さな村である（図 1）。

この地域はモン（Hmong）、ミエン（Mien）などの焼畑移動耕作を生業としてきた数多くの民族が暮らしてきた場所でもある。険しい山々が広がるタイ北部は、かつては焼畑耕作地と豊かな動植物資源をもつ広大な森に覆われていた。ムラブリの生活圏である標高 1000 メートル以上の森は、常緑雨林（briq caboq sung）、常緑乾燥林（briq mēk/briq krum）、混交落葉樹林（briq citce）、低木疎林（briq praw）などである。気候は夏季（nyam thu. ul）、雨季（nyam mēq hot）、冬季（nyam takat）の 3 種に分類される。ムラブリはこれらの森の種類と季節の組み合わせで変化する多様な動植物資源に関する知識を豊富に持ち、これを狩猟採集して食料としてきた。

2. データの収集

本研究で収集したデータは著者らがまとめたものであるが、原データは 2011 年から 2014 年の間

にタイ・チェンマイ県の国立山地民博物館前職員のソムキアット・チャムロン氏、同タウォーン・フーフアン氏が5回にわたって現地で聞き取り調査を行い、これに対して大澤、下田らが5回にわたって追加調査し、さらに同資料を元にして2012年から2014年の間現地に滞在した二文字屋が観察・聞き取り調査をした情報を追加したものである。なお、聞き取りをした定住キャンプの主なインフォーマントは以下の人々である。

- 1) バイ・ヒランキーリー (Mrs. Baai Hirankhir-iii)
- 2) ニット・ヒランキーリー (Mrs. Nit Hirankhirii)
- 3) リアム・スションキーリー (Mrs. Riam Suchonkhirii)
- 4) チャン・スションキーリー (Mr. Can Suchonkhirii)
- 5) ノーイ・ドイサック (Mr. Nooi Doisak)
- 6) タワッチャイ・ドイサック (Mr. Thawatchai Doisak)
- 7) モーン・マルアンプライ (Mrs. Mong Ma-luangphrai)
- 8) ワニダー・ドイサック (Ms. Wanidaa Doisak)

IV ムラブリの子どもの遊び

深い森の中での遊動生活において、ムラブリの子どもたちの遊びは周囲の自然環境に応じたものであった。定住生活を送るようになった現在でも、昔ながらの遊びが頻繁に観察される。遊び場は定住キャンプ内の広場であったり、通路であったり、または定住キャンプ近くの森であったり、小川であったりする。ムラブリの子どもたちは日中の殆どの時間を遊びで過ごしている。

子どもに限らず、大人もまた子どもたちと遊びに興ずることもあるが、遊びを教えるのは基本的に年上の子どもたちである。思春期以降になると、近隣村に住むモンの影響もあろうが、ボールや輪ゴムなどを使った遊びも頻繁に見られるようになった。最近ではタイ人の子どものが行う遊びが少しずつ入ってきており、おはじき (ngên káp) は人気のある遊びとなっている。

幼児期から思春期前の子どもたちは手近の石や

図2 定住キャンプの近隣の空き地で仲間と戯れる子どもたち

捨ててある枝などをブリコラージュし、竹林やバナナの木々の茂みなど周囲の環境の特徴を生かして遊んでいる。

図2は定住キャンプ内の空き地で仲間同士戯れる子どもたちである。ムラブリの幼児の遊びは一定の規則や順番、役割、勝ち負けを明確にせず、お互いに組み合い、追いかかけあい、戯れ、じゃれあい、お互いに身体を触れ合っている姿が目立って多いのが特徴である。それはまるで子犬同士がお互いに噛み合い、倒しあい、追いかかけ合う姿に似ているといってもよい。しかしこの研究では、こうした流動的で明確に遊戯としての境界を認めにくい、あるいはある一つの遊びとしての独立性を認め難い活動は遊びとしては把握していない。こうした独立した遊戯としての単位（明確にメンバー、空間、時間、順位、反則ルール、名称などが把握できる単位）として捉えられない流動的な行動が幼児期ほど多く見られる。ここで分類し記述した遊びは、遊びを一定の単位として独立して把握したものである。

1. バナナの馬乗り (ngên khing lam kuëy) (図3)

男女とも行う遊び。バナナの木を長さ50～100センチに切り枝を幹の端に差し取っ手にする。この「乗り物」を坂の上まで引き上げて、跨り、坂の上から滑り降りる。2～6人乗りが可能である。図は一本の大きなバナナの「馬」に3人の子どもの跨り、草に覆われた坂を下ろうとしている

図3 バナナの馬乗り (ngên khing lam kuëy)

ところである。

1) 年齢層	およそ4歳から13歳くらいまで
2) 参加者性別	基本的に男子（しかし時に女の子も興味本位で参加）
3) 時期	特定（新年の祭り）
4) 時間帯	日中
5) 観察頻度	月1回以下
6) 最低参加人数	2人
7) 最高参加人数	6人程度
8) 使用道具・材料	山刀、バナナの木
9) ルール	切り出したバナナの幹に乗り、斜面を滑り落ちる。基本的に競争という形式を取ることはなく、交代で行う。バナナの幹は人数に応じて切り出す。通常は1~2本。
10) 勝ち負けの有無	基本的に競争という形式を取らない
11) 参加の排他性	なし（誰でもよい）
12) 開始の契機	誰かによる提案
13) 終了の契機	飽きるまで繰り返す
14) 遊びの特徴と身体技術との関係	

村の周辺のパナナの木は先住民のモンの所有物であり、自由に使えるものは森にしかない。そのため以前に比べて遊びの頻度は劇的に低下している。大人が関与することはない。そのためバナナの木は子どもたちによって切り出される。1キログラムほどある山刀の柄を両手で握り、斜め上から勢いをつけて山刀を振り、バナナの幹（直系20~30 cmほど）を切り取る。そのサイズは人

数によって変わるが、長さは約1メートル。子どもたちはこれに乗って足で地面を蹴って坂を滑り降りる。年長の子がいる場合、バナナの幹に木の枝を指して足置き場を作る。これは坂でスピードが出て体が滑って乗り物から落ちないためである。山刀を振り回す筋力とその扱い方、不整地を滑り降りるには慣れが必要である。別の遊びをして飽きた際に行うことが多いため、始めからこの遊びをすることは少ない。この遊びは長続きすることがほとんどない。

2. バナナ葉っぱの馬乗り (ngên brang hn. taq kuëy)

子どもたちはバナナの葉っぱを切り取って馬に見立て、それに乗って疾走する。遊びに飽きると惜しげもなく捨ててしまう。江戸時代にみられた日本で春駒 (hoby horse) と呼称していた遊びに似ている。

1) 年齢層	およそ5歳から14歳くらいまで
2) 参加者性別	男女混合
3) 時期	不特定
4) 時間帯	日中
5) 観察頻度	1回/週
6) 最低参加人数	2人
7) 最高参加人数	6人
8) 使用道具・材料	山刀、バナナの葉
9) ルール	なし
10) 勝ち負けの有無	なし
11) 参加の排他性	なし
12) 開始の契機	誰かの提案
13) 終了の契機	飽きるまで
14) 遊びの特徴と身体技術との関係	

この遊びはバナナの葉をそのまま使用する。これに跨り、平地で地面疾走するだけである。飽きるとバナナの葉を捨てて、場所を移動し、他の遊びを行う。

3. 蔓草遊び/ブランコ (ngên mòq : ngên br.tiy or ngên br.tëë) (図4)

森は大小様ざまな樹木と蔓草に覆われている。子どもたちは猿のブラキエーションのように木の枝や蔓草にぶら下がり、揺すり、飛び降り、縦横

図 4 蔓草遊び/ブランコ (ngên mòq : ngên br.tiy or ngên br.têé)

に動き回って遊ぶ。時に細い蔓草の先に短い木の枝を巻き結んで、足場として揺り動かしたり木に登ったりする。これには定型的なルールがあるわけではなく、また森の木々は公園の遊具のように規則的に配列されているわけではなく、高さ、太さ、位置は極めて多様である。蔓草遊びに近いものとしてブランコがある。男子も女子も森ではブランコを作って遊ぶ。人類学でブランコの起源を論じることがあるが、少なくともムラブリにおいてこれが見られるということは、人は太古の昔からこのような遊びをしていた事であろう。とすれば、歴史時代に入ってからブランコ遊びが始まったのではなく、はるかに以前から人は森で蔓草と戯れていたと考えるのが自然である。図は太い蔓草に腰掛けて談笑する子どもたちである。

1) 年齢層	おおよそ5歳から、14歳くらいまで
2) 参加者性別	男女混合
3) 時期	不特定
4) 時間帯	日中
5) 観察頻度	2~3回/週
6) 最低参加人数	3人
7) 最高参加人数	5人
8) 使用道具・材料	蔓草
9) ルール	蔓を使って交代で遊ぶ。競争という形式は取らない。
10) 勝ち負けの有無	なし
11) 参加の排他性	特になし、誰でもよい
12) 開始の契機	誰かによる提案
13) 終了の契機	飽きるまで
14) 遊びの特徴と身体技術との関係	

村の周辺や森で遊んでいる際に見つけた太い蔓を使って、ぶら下がったり、ぶら下がった状態で別の子どもに勢いをつけて揺らしてもらったりして遊ぶ。両手で蔓を掴み、体を蔓に密着させて太ももで挟んで上る。揺れの大きさを楽しむため高くは上らない。年長の子が年少の子を手助けして上らせ、手で揺らせて遊ぶこともあるが、我先にと年長の子が遊ぶため、なかなか順番が回ってこず、泣き出す子もいる。

森で遊ぶということは身体にとっては至って自由度の高い、しかも身体の平衡性、手足の筋力と柔軟性を鍛錬するファクターに満ちている。町の公園に設置されている安全性を気遣ったブランコと比べたら、彼らのブランコは腰掛けにくく、振り落とされないように大きく揺らすには適切な下肢の振り方とそれに対応した体幹部の協調性と平衡能力が必要である。空間的な姿勢の保持能力も養われるのであって、ブランコといってもなかなか難しい技術を要し、基本的な動作としては公園の遊具としてのブランコと類似しているが、実は身体技術的なレベルは数段高度である。さらに森の中では、毒蛇などの危険をつねに意識しなければならないので鋭い観察力と視力も備わっていないなければならない。

4. ままごと (èh ngên gèn)

大人が食料をさばき、これを分配して料理し、出来上がったものを食べるという一連の行動を模倣して遊ぶ。ムラブリの社会には貧富の差は殆ど見られず、収穫されたものを平等に分配するという習慣をもっている。食生活は非常に簡素であって、手の込んだ料理は見られない。そういった大人の生活を模倣する遊びには年齢の近い異性も交えて行われる。手近にある葉、草、木片、捨てられた竹の筒など周辺にある物を食材や簡単な食器に見立てて遊ぶ。

1) 年齢層	おおよそ3歳から6歳くらいまで
2) 参加者性別	男女混合
3) 時期	特になし
4) 時間帯	日中
5) 観察頻度	2~3回/週
6) 最低参加人数	1人

- 7) 最高参加人数 4人
- 8) 使用道具・材料 小枝、竹、葉っぱなど、そこらへんに転がっているもの。最近では鍋などを使う。
- 9) ルール 遊ぶ内容(調理など)によって性別は関係ない。明確な役割はなく、それぞれがしたいことをする。
- 10) 勝ち負けの有無 なし
- 11) 参加の排他性 なし。誰でも参加出来る
- 12) 開始の契機 家にいるときに誰かが始め、そこに他の子が集まってくる。
- 13) 終了の契機 飽きた時
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係
森では調理に使う竹筒を用いて、残り火にかざして遊んだりするが、危険なため、大人がしばしば注意する。調理をまねて遊ぶ。村にいる時は、家にあるスプーンを使って、空っぽの鍋の中をかき混ぜたりする。ここで、砂や小石、葉っぱなどを鍋に入れるようなことはしない。男女ともにやり始めたものが調理の真似をし、他の子どもはそのそばに座って見守る。一通りかき混ぜた後、それをみんなの前に出して、手で掬って食べる真似をする。時には大きな葉っぱを取り出して、そこにイメージされた食事を載せることもあるが、定住化後は、鍋やスプーンなどがあるため、葉っぱを使うことはまれである。

5. 鬼ごっこ (ban tot tò mlaq) (図5)

世界中に普遍的に見られる遊びであり、ムラブリの子どもにおいてもしばしば行われている。男女に限らず一緒に遊ぶことができ、夕方にしばしば見られる。

- 1) 年齢層 おおよそ7歳から、15歳くらいまで
- 2) 参加者性別 男女混合
- 3) 時期 特定しない
- 4) 時間帯 日中～夕方
- 5) 観察頻度 2～3回/週
- 6) 最低参加人数 5人
- 7) 最高参加人数 9人

図5 鬼ごっこ (ban tot tò mlaq)

- 8) 使用道具・材料 なし
- 9) ルール 鬼を決め、一定の空間を遊びの範囲と決めておく。定住地内ではキャンプ内の緩やかな坂を利用し、道路に出来たくぼみを基準にしてセンターラインを設け、そこに鬼役が立ち、敵の陣地と味方の陣地に分けておく。味方の陣地から敵の陣地に入り込み、すばやくダッシュして行ったり来たりを繰り返す。この時に鬼にタッチされないようにする。タッチされると鬼役を交代する。
- 10) 勝ち負けの有無 あり
- 11) 参加の排他性 年齢の比較的高い子どもたちだけが参加できる
- 12) 開始の契機 誰かが提案して始まる
- 13) 終了の契機 飽きた時
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係
幼児も遊びに混ざろうと近寄り、一緒になって遊ぶが、ルールは適応されず、勝手に年長児の後を追ったりして遊び、員数外という扱いを受ける。鬼は中央のライン沿いにしか動けず、片方の陣地から他方の陣地に鬼にタッチされないよう、何度も往復し、逃げ回る子どもたちを追い掛け回す。子どもたちはタッチされないように全力で反対側に走って行き、鬼が近づいてくると体をくねらせ、あるいはしゃがんだりしつつ、鬼のタッチから逃げる。鬼ごっこの一形式といってよいが、動き方

図6 かくれんぼ (hnpok tò mlaq)

はインドのガバティやタイのムーティーの原型を単純化した遊びのようである。

6. かくれんぼ (hnpok tò mlaq) (図6)

男女とも夕方によくかくれんぼをする。遊び方は、鬼が目を手で隠し、隠れた子達に準備はできたかどうか確認をする。隠れた子が準備できたと答えると、鬼が捜しに行く。最初に見つかった子が次の鬼となる。しかし、もし全ての子を見つけ出せない場合には、次回も鬼役をやらなければならない。実際に遊んでいる際は見つかった子は鬼に他の子の隠れる場所のヒントをやるが、その後またどこかに隠れることが出来る。鬼を困らせて楽しむこともある。森には隠れる場所には事欠かない。岩、樹木、樹上いたところが隠れ場所である。

1) 年齢層	おおよそ7歳～13歳くらいまで
2) 参加者性別	男女混合
3) 時期	特定しない
4) 時間帯	日中～夕方
5) 観察頻度	2～3回/週
6) 最低参加人数	4人
7) 最高参加人数	7人
8) 使用道具・材料	なし
9) ルール	ジャンケンで鬼を決め、残りの子どもたちが隠れる。最初に見つかった子どもが次の鬼役を務める。
10) 勝ち負けの有無	ある
11) 参加の排他性	なし。誰でも参加できる
12) 開始の契機	誰かの提案

13) 終了の契機 飽きるまで

14) 遊びの特徴と身体技術との関係

比較的年齢層は高い。幼児たちも年長児が隠れたところに一緒に隠れたりすることはあるが、早く走れないため、隠れるスリルを楽しむだけである。定住後は森へのアクセスが難しくなったため、かくれんぼは村内ですることが多い。そのため隠れ場所も、木の上や岩の影などの自然物から、家の内外といった人工物へと変化している。家の外では鬼の動きに合わせて隠れる場所を移動することができるが、家の中ではドアの後ろやベッドの下、棚の影にじっとし、隠れる場所を移動することはあまりない。女の子は家の中を好むが、男の子は家の外でダイナミックに動き回りながら鬼の目から逃れることを好む。

近年では森でかくれんぼをすることは少なくなってしまうが、ムラブリが森の中でかくれんぼをする姿を想像すると非常にエキサイティングである。彼らのずば抜けた視力と聴力、観察力、そしてひそかに息を殺して獣に気づかれないようにジッと気配を断つ能力は、実はかくれんぼのような遊びの中からも養われるのであろう。想像ではあるが遊びは狩猟能力の基礎トレーニングになりそうである。

7. 槍投げ (dor khòt)

男子の遊び。竹や木を研ぎ、削り、槍を模した遊具を作る。遊び方は、バナナの木や森の木々を獲物に見立てて、槍を投げる。

森の中ではたまに男の子達が槍（竹の棒）投げをする。的までの距離は10メートル前後である。実際にムラブリが狩をする際には森の中を逃げ回る動物を射止めるのであるから、固定された樹木を的にするのはより難度が低い狩の練習となっている。

1) 年齢層	おおよそ10歳から16歳くらいまで
2) 参加者性別	男子
3) 時期	特定しない
4) 時間帯	日中
5) 観察頻度	1回/週
6) 最低参加人数	2人
7) 最高参加人数	4人

- 8) 使用道具・材料 竹と山刀
- 9) ルール 木の幹などを的に見立てて、竹を縦に裂いて作った槍を投げつける。
- 10) 勝ち負けの有無 明らかに的を射たほうが勝ちだが、その結果によって優劣をつけない。
- 11) 参加の排他性 誰でもよいが、男子に限る
- 12) 開始の契機 誰かの提案
- 13) 終了の契機 飽きるまで
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係

他の遊びに比べて、参加する子どもの年齢層は高い。定住以前は大人が行う槍狩猟の真似をして子どもたちが遊んでいたが、定住後は槍狩猟が行われなくなったことにより、頻回には観察されなくなっている。また、性別による排他性のない他の遊びと比較すると、槍投げは男子のみで行われる。キャンプ内ではこの遊びはあまり見られず、薪集めや農閑期における森での余暇に行われる。槍は竹製が多く、山刀で竹を縦に裂いて先端を尖らせた槍と、細い竹の先端を尖らせた槍の二種類に分けられる。的は多くが木の幹で、的に槍が当たるかどうかで競争することが多い。何回中多く当たった方が勝ち、といったルールは特に設けない。的に当たった子どもは他の子どもに当たったことをアピールするだけであって、競争的性格をもつものの、勝敗は極めて曖昧である。多くの子が右手で槍を握み、的めがけて投げる。言うまでも無く、狩猟の原型である。ムラブリの投動作は幼い子どもの時から見られる。もちろんムラブリにはボール遊びのようなものが無いにもかかわらず、上手にボールを投げることができるのは、この槍投げ遊びが基礎にあるのかもしれない。

8. 水泳、水遊び (ngën wëk) (図7)

男子も女子も同じように水遊びをよくする。ファイユアック村の周辺にある川は流れも緩く、水深は1メートルから2メートル程度の小川である。雨季には水量が多く流れもやや急になるが、乾季には一転して非常に浅くなる。子どもたちはこのような川でよく遊んでいる。泳いだり、潜ったり、小さな魚や沢蟹を捕ったりする。特に泳法のような定型的な技術があるのではなく、犬掻き

図7 水泳、水遊び (ngën wëk)

に似た自己流である。同じく狩猟採集民と言ってもミャンマーのモーケンのように大海原の洋上で泳ぐのとは全く異なるので、長時間、長い距離を、すばやく泳ぐというような必要性はない。もちろん深く、長く潜水することもない。ムラブリの泳ぎは水泳教室で訓練されるような泳ぎではない。したがって「泳ぐ」というカテゴリーで彼らの泳ぎを理解できるかどうかは別途調査と考察が必要となろう。水中で身体を浮かして移動させる技術を「水泳」、「泳ぎ」、と定義すれば、彼らは稀には3歳から泳ぎ始め、7歳ぐらいでほぼ全員のムラブリが泳げるようになる。一体にタイ人は泳ぐことを稀にしかしないし、ムラブリが直接交渉を持つことがある隣接地のモンが日常的に水泳をしているところを見たことがない。つまり、この山地に生活する人々は泳がないのであるから、むしろムラブリが泳ぐことはムラブリが遊動してきた自然環境に依存しているかも知れない。水泳という身体運動技術は山中に住む、海に関係のない人々にとって重要度はかなり低いのであるが、その中にあってムラブリがどのような泳ぎをするかは別として、泳げるということは、水泳と人とのかわりを考える上で興味深い。

水泳に関連して水遊びあるいは泥遊びがある。以下はこの遊びの観察である。

- 1) 年齢層 おおよそ4歳から9歳くらいまで
- 2) 参加者性別 男女混合
- 3) 時期 雨季
- 4) 時間帯 日中
- 5) 観察頻度 1回/週

- 6) 最低参加人数 3人
- 7) 最高参加人数 5人
- 8) 使用道具・材料 なし
- 9) ルール なし
- 10) 勝ち負けの有無 なし
- 11) 参加の排他性 なし
- 12) 開始の契機 誰かの提案
- 13) 終了の契機 飽きるまで
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係

雨季に雨が降って沼が生まれた時に、泥を使って遊ぶ。乾季でも、川底の泥で遊ぶ。遊びは男子であることが多いが、女子が混ざっても一緒に遊ぶことができる。泥を相手につけ合うだけでなく、泥を手で掬い、自分の顔（特に頬）に泥を塗ることもある。泥だらけになった顔をお互いに見せ合って笑い合う。川での泥遊びは、そのまま魚や沢蟹を目的とした食料探しに直結してゆき、狩猟採集民であることと遊びが連続性を持っている。他の遊びも同様に、他の遊びや採集活動へと容易に移行し、どこで終わるのかは極めて不明瞭である。

9. 木登り (ngën khing lam) (図8)

ムラブリの生活は森の中で営まれてきた。当然のことであるが彼らの木登りは生活上の必然であり、果物を採集するという意味からも木登りは遊びであるのと同時に生活技術でもある。狩猟採集民にあっては採集が生業であるのと同時に余暇に於ける遊びともなる。木登りは他の遊び同様に生活と娯楽の両義的な行動である。ムラブリは男子も女子も同じように木登りをする。これは日常的に観察される。

- 1) 年齢層 おおよそ5歳から12歳くらいまで
- 2) 参加者性別 男女混合
- 3) 時期 なし
- 4) 時間帯 日中
- 5) 観察頻度 2~3回/週
- 6) 最低参加人数 2人
- 7) 最高参加人数 4人
- 8) 使用道具・材料 なし
- 9) ルール なし
- 10) 勝ち負けの有無 なし

図8 木登り (ngën wëk)

- 11) 参加の排他性 なし
- 12) 開始の契機 誰かの提案
- 13) 終了の契機 飽きるまで
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係

小さい子どもは大きい子どもを真似し、木に登り、ぶら下がり、木々をブラキエーション動作で移動する。ムラブリの木登りのスキルは極めて高い。木登りという一方向的な単純な動作ではなく、森における移動技術とも呼べる。彼らの木登り運動には現代の都会人にはまず見られない動きが随所に見られる。図に見られる技術を5歳にしてある程度習得している。

木登りの方法には大別して太い木と細い木にその登り方を2分できる。太い木であると、四肢で木を挟み込み、上肢と下肢を交互に引き、押すまたは蹴るようにして、身体を上方に移動させる技術が必要になる。

これに対して灌木を登ってゆくときの技術は独特である。

図8の木は直径が比較的に細いものであるから直接足底面を木に密着させ、足指で木の表面をしっかりと挟みつけて蹴りだすように推進力を生んでいる。下肢に対して上肢は手掌で木の裏側をしっかりと捉え、手前に引きつけている。四肢を交互に入れ替えることで体重をうまく分散させ、四肢のうちの二カ所をすばやく上に移動させて3

図 9 家づくり遊び (ngèn èh gég)

点支持で巧みに登ってゆく。

まだ幼い子ども(5~6歳)は木に登るだけだが、もう少し大きくなると、季節によって実る果物を採ることを目的とすることもある。この場合、果物採集の木登りという明確な目的があるので、木登りが単なる遊びではなく、食料を得るための活動でもある。木登りに参加する子どもは総じて男児が多いが、女児が参加することもしばしばある。

10. 家づくり遊び (ngèn èh gég)

ごっこ遊びの一種。伝統的な風よけ(家)のミニチュアサイズを作る遊びである(図9)。

1) 年齢層	おおよそ3歳から6歳くらいまで
2) 参加者性別	男女混合
3) 時期	なし
4) 時間帯	日中
5) 観察頻度	1回/週
6) 最低参加人数	2人
7) 最高参加人数	4人
8) 使用道具・材料	木の枝、葉
9) ルール	なし
10) 勝ち負けの有無	なし
11) 参加の排他性	なし
12) 開始の契機	誰かの提案
13) 終了の契機	家ができるまで
14) 遊びの特徴と身体技術との関係	

ムラブリの伝統的な風よけのミニチュア版を作る遊びである。道具はなく、そのへんに転がっている枯葉や木の枝などを使って作る。道具を使って材料を加工することがないのは、理由の一つに、参加する年齢層が低いことが挙げられる。またこ

図 10 粘土遊び (ngèn ban bèq)

れは遊びであると同時に、風よけというムラブリにとっては生活上必要な構造物の作製技術の学習である。支柱をしっかりと地面に固定しないと倒れてしまうことを子どもはこうした遊びを通じて学習する。

11. 粘土遊び (ngèn ban bèq)

男子も女子も遊べる遊び。川辺の粘土を掘って、人間、動物、果物に似せて形を作る(図10)。

1) 年齢層	おおよそ3歳から6歳くらいまで
2) 参加者性別	男女混合
3) 時期	雨季
4) 時間帯	日中
5) 観察頻度	1回/週
6) 最低参加人数	2人
7) 最高参加人数	5人
8) 使用道具・材料	泥
9) ルール	なし
10) 勝ち負けの有無	なし
11) 参加の排他性	なし
12) 開始の契機	誰かの提案
13) 終了の契機	造形し終わるまで
14) 遊びの特徴と身体技術との関係	

自然発生的にできた粘土を使って遊ぶため、遊ぶ時期は主に雨季である。定住した現在では余り見られない。年齢層は比較的幼く、両手を使って粘土をこねて人間や動物、果実を造形する。遊び終わると故意に壊すことなく、そのままにしておく。粘土で作った人間や動物を人形のように動かして遊ぶことはない。あくまで造形することに重点がおかれる。

12. 石投げ (dor kèp)

男子も女子も遊べる遊び。3~4メートル離れている的に石を投げ当てるとい遊び。

- 1) 年齢層 おおよそ5歳から13歳くらいまで
- 2) 参加者性別 主に男子
- 3) 時期 なし
- 4) 時間帯 日中
- 5) 観察頻度 4~6回/週
- 6) 最低参加人数 2人
- 7) 最高参加人数 5人
- 8) 使用道具・材料 小石
- 9) ルール なし
- 10) 勝ち負けの有無 なし
- 11) 参加の排他性 なし
- 12) 開始の契機 誰かの提案
- 13) 終了の契機 飽きるまで
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係

適当な小石を拾い、木の幹などを的に見立てて投石する。勝ち負けはないが、石を的に当てた子どもは喜び、まだ当てていない子どもはそれを見て発奮する様がしばしば観察された。女子も参加できるが、観察した限りでは主に男子が遊びの主体であった。的に当たると、次は的との距離を遠くして難度を上げたり、的をより小さくすることで難度を上げたりする工夫も見られる。ある中年男性は、猪などの野生動物を追い払う際に石をよく使ったと語ったことがある。こうした森での経験と投石遊びはどこかで結びついていよう。使用遊具の石は手に入りやすいため、定住キャンプ内外で頻繁に観察される遊びである。

13. カブトムシの遊び (ngên kwang) (図11)

男子の遊び。カブトムシを捉えて、虫同士を戦わせたり1~2メートルの長さの細い紐を使って、二匹の角を繋げて、飛ばして遊ぶ。

- 1) 年齢層 おおよそ4歳から12歳くらいまで
- 2) 参加者性別 主に男子
- 3) 時期 なし
- 4) 時間帯 日中
- 5) 観察頻度 2~3回/週

図11 カブトムシの遊び (ngên kwang)

- 6) 最低参加人数 2人
- 7) 最高参加人数 4人
- 8) 使用道具・材料 紐、カブトムシ
- 9) ルール なし
- 10) 勝ち負けの有無 なし
- 11) 参加の排他性 なし
- 12) 開始の契機 虫を捉えた時
- 13) 終了の契機 飽きるまでまたは虫を食べなくなった時まで
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係

子どもたちはしばしばカブトムシを探しに畑や森に入る。森の中でのムラブリの識別力はその視力とともに非常に鋭く、高く、獲物をすぐに見つけることが出来る。カブトムシを高い樹上に見つけると、直ちに素早く木に登って行って、捕獲する。

カブトムシを使った遊びには、大きく分けて2種類がある。一つは、紐をカブトムシの足に結びつけて、飛ばす方法(図11)、さらに地面に2匹のカブトムシを対峙させて格闘させる遊び方である。カブトムシを飛ばすには一匹でよいが、格闘させるには二匹以上が必要である。飛ばす遊びでは、紐をつけたカブトムシを飛ばして飛んで行く方向に自分も疾走しながら落とさずに長く飛ばすことが目標である。これには勝ち負けはない。一方、格闘はカブトムシが角で互いを押し合う様を見て楽しむ。格闘の場合、どちらかが死ぬまで格闘させることはない。しかし、いずれの遊び方でも、遊びが終わった後、カブトムシを焚き火に入

れて焼き、食べることがあるが、これなどはいかにも狩猟採集民の子どもである。

14. 土堀り (ngән cuāk bèq)

男子も女子もやる遊びである。大人が採集活動において森で芋などを探している時の大人の姿を模倣した遊びである。端の尖っている木や鋤で小さい木を掘ったりして、誰が一番上手か競い合う。大きい子どもの場合は、ヤムイモ探して競争することもある。

- 1) 年齢層 おおよそ4歳から6歳くらいまで
- 2) 参加者性別 男女混合
- 3) 時期 なし
- 4) 時間帯 日中
- 5) 観察頻度 普通 (月5回以上15回以下) 2~3回/週
- 6) 最低参加人数 3人
- 7) 最高参加人数 4人
- 8) 使用道具・材料 木片、鋤すき
- 9) ルール なし
- 10) 勝ち負けの有無 なし
- 11) 参加の排他性 なし
- 12) 開始の契機 誰かの提案
- 13) 終了の契機 掘り起こすまで
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係

端の尖っている木や鋤で土を掘る。遊びを通じた学習という視点からみれば、森で主食であったイモの採集をする大人の姿を真似しているようにも見えるが、イモの疑似物を土に予め埋めておいたり、土を掘って「イモがあるぞ!」といった工夫は確認できない。また、誰が一番掘るのが上手いかを競うという側面は確認できなかった。上手く掘るというよりも、どれだけ深く掘れるかということが、現在では主な楽しみ方となっているように推察している。

15. 草切り (ngән thet hny hnyay)

子どもの誰もがする一般的な遊び。長い木の枝を持ってこれをナイフに見立て、草を切って遊ぶ。

- 1) 年齢層 おおよそ4歳から9歳くらいまで
- 2) 参加者性別 男女混合

- 3) 時期 なし
- 4) 時間帯 日中
- 5) 観察頻度 4~6回/週
- 6) 最低参加人数 2人
- 7) 最高参加人数 7人
- 8) 使用道具・材料 小枝=細長い木の棒
- 9) ルール なし
- 10) 勝ち負けの有無 なし
- 11) 参加の排他性 なし
- 12) 開始の契機 誰かの提案
- 13) 終了の契機 飽きるまで
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係

もっとも頻繁に観察される一般的な遊びである。その大きな理由として、最も手軽にできること、移動中でも遊ぶことができるといった点が挙げられる。周囲にある適当な長さの木の枝を拾って片方を握り、腰の辺りで左右に風を切るように振る。丁度その高さにある雑草めがけて振り、草を切っていく、非常にシンプルな遊びである。

16. 車乗り (ngән tharāk jur)

定住後に外部の社会に触れてから発生した遊びである。自動車に見立てた石や木片を紐に縛りつけ、これを引っ張りながら車の音を擬声しながら走る。

- 1) 年齢層 おおよそ5歳から9歳くらいまで
- 2) 参加者性別 男女混合
- 3) 時期 特になし
- 4) 時間帯 日中
- 5) 観察頻度 2~3回/週
- 6) 最低参加人数 3人
- 7) 最高参加人数 6人
- 8) 使用道具・材料 紐、細長い枝
- 9) ルール なし
- 10) 勝ち負けの有無 なし
- 11) 参加の排他性 なし
- 12) 開始の契機 誰かの提案
- 13) 終了の契機 飽きるまで
- 14) 遊びの特徴と身体技術との関係

定住後に始まった極めて新しい遊びである。テレビや村のすぐそばの道路を走る車に着想を得ていると考えられる。縦に並んで家にある紐を手で

握り先頭について歩きながら、車に乗っているような雰囲気を楽しむ。紐がない場合は、細長い小枝を代用することもある。歩きや走りなどを織り交ぜて先頭の子どもは速度に変化を付け、車の音を口で発しながら楽しむ。なお、ここに見られる体の使い方には、キャンプ内の幼児センターで教えられる整列と移動もまた影響を与えているようにも思える。このセンターでは子どもを縦に整列させ、前の人の肩に手をかけて後ろ前を繋ぎ移動する方法がとられている。

謝 辞

現地調査にあたっては、ソムキアットチャムロン氏、タウォンフーフアン氏(両氏共に、元タイ・チェンマイ県国立山地民俗博物館前職員)、サターバンスイースコンタミット(メーランカム村学校(タイ王国チェンマイ県))、ナリットプラディット(SHERNA チェンマイ)、パーウィダーゲオサイ氏、バカーワンカーレック氏、ラッカナーピンムアン氏(内務省地方行政区管理組織・幼児開発センター)に協力して頂きました。ムラブリ語のローマ字表記については伊藤雄馬氏(京都大学大学院)にも協力して頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

付 記

この研究は、科学研究費補助金基盤研究(A)課題番号23240098(研究代表者 大澤清二)によって遂行された。

注

注1) ムラブリのバンド(band)は核家族の任意のかつ一時的な集団を基本単位としている。1つのバンドはおおよそ10~15人(4~5家族)程度で構成される(Pookajorn, 1992a)。1つのバンドの活動範囲は、1980年代当時は約30平方キロメートルであった(Pookajorn, 1992b)。

注2) 本稿ではムラブリ語をローマ字表記で記しているが、その書記システムは(伊藤・二文字屋, 2015)に基づく。

文 献

Bernatzik, H. A. (1938) Die Geister der Gelben Blaetter,

Bruckmann, Munchen : English translation : The spirit of the yellow leaves ; with an introduction, Linguistic analysis of the Mlabri, and a bibliography by Jorgen Risc, Robert Hale Ltd., 1951.

Delang, O. C. (2002) Deforestation in Northern Thailand : the result of Hmong farming practices or Thai development strategies?, Soc Nat Resour, 15, 483-501

Ikeya, K. and Nakai, S. (2009) Historical and contemporary relations between Mlabri and Hmong in Northern Thailand, Senri Ethnological Studies, 73, 247-261.

伊藤雄馬, 二文字屋脩(2015)ムラブリ語:日本語基礎語彙集,(印刷中)

Nimonjiya, S. (2015) Another History of Chao Khao, The Mlabri in Northern Thailand, Aséanie (forthcoming)

西田正規(2007)人類史のなかの定住革命, 講談社学術文庫, 講談社

Pookajorn, S. (1992a) Introduction, In : Surin Pookajorn and Staff (eds.), The Phi Tong Luang (Mlabri) : A Hunter-Gatherer Group in Thailand, Odeon Store Printing House, 1-27

Pookajorn, S. (1992b) Interpretation of archaeological and ethnoarchaeological date comparing the Hoabinhian culture or technocomplex and the Mlabri Group, In : Surin, P. and Staff (eds.), The Phi Tong Luang (Mlabri) : A Hunter-Gatherer Group in Thailand, Odeon Store Printing House, 175-204

Schliesinger, J. (2003) Mountain People of Laos Vol. 2 : Profile of Austro-Asiatic-Speaking Peoples, White Lotus

Seidenfaden, E. (1919) Further Note of Chaubun, etc., J Siam Soc, 13 (3), 49-51

Trier, J. (1992) The Mlabri people of Northern Thailand : social organization and supernatural beliefs, In : Walker, A. R. (ed.), The Highland Heritage : Collected Essays on Upland North Thailand, Double-Six Press, 225-263.

Trier, J. (2008) Invoking the Spirits : Fieldwork on the Material and Spiritual Life of the Hunter-Gatherers Mlabri in Northern Thailand, Aarhus University Press.

Vongvipak, C., Surin, P. and Staff (eds.) (1992) Economic and Social Change among the Mlabri, The Phi Tong Luang (Mlabri) : A Hunter-Gather-

er Group in Thailand, Odeon Store Printing House,
92-103
Winichakul, T. (2000) The others within : travel and
ethno-special differentiation of siamese subjects

1885-1910, In : Turton, A (ed.), Civility and
Savagery : Social Identity in Tai States, Curzon
Press, 38-62
(受付 : 2014 年 9 月 12 日, 受理 : 2014 年 10 月 15 日)

大澤 清二 (おおさわ せいじ)

現職 : 大妻女子大学副学長, 理事, 同大
学院人間文化研究科長, 同人間生
活文化研究所長, 地域連携推進セ
ンター所長

Editor in Chief, International Journal of Human Culture
Studies, 環境と子どもの発育発達の相関に関する研究プロ
ジェクトをタイ, ミャンマー, ネパールなどで行っている。
現在は狩猟採集民モーケンやムラブリをはじめとして東南
アジア諸民族の発達調査を行っている。教育学博士